



2024年2月1日放送

健康で幸せな人生 100 年を創出するための「空間×ヘルスケア 2030」 ～薬剤師の再定義 ヘルスケアマイスター～

日経 BP 総合研究所
チーフコンサルタント・主席研究員 高橋 博樹

今日お話しするヘルスケアマイスターですが、これは我々が進めてきた「空間×ヘルスケア 2030」というプロジェクトの中で、大切な要素としてお話をしてきました。皆さんにもこの辺りのお話をさせていただきます。

まず、「空間×ヘルスケア 2030」とは何か？というその背景から含めてお話をします。実は皆さんもご承知だと思いますが、医療・介護給付費の見通しが 2025 年には 63 兆円で、2040 年になると 93 兆円と予測されております。この 63 兆円というインパクトは税収と同じくらいで、93 兆円というのは、ほぼ国家予算です。これぐらいの費用がかかってくると、これはとても大変なことに実はなっています。いろんな要素がありますが、大きなものは 2025 年問題だと我々は考えております。団塊の世代の方々が一斉に後期高齢者になられます。そうすると、今 1,500 万人いる後期高齢者が、2025 年には 2,200 万人にまで膨れ上がります。5 人に 1 人が後期高齢者という国は、実は世界で日本が唯一です。

長寿自体はとても喜ばしいことです。ご本人にとっても、ご家族にとっても、あるいは社会にとっても喜ばしいことですが、それは健康で幸福であるということが言えるかどうかだと思います。そして、現状でいくと、さきほどの医療・介護給付費がまさにそうですが、高齢になるにつれいろんな病気を併発して、病気と付き合いながら、つらい思いをしながら生きていくということもあるかと思えます。こういう方が増えていくと今は予測されています。

我々がやっている「空間×ヘルスケア 2030」というプロジェクトは、これを何とかしようというプロジェクトです。目的は、「健康で幸福な人生 100 年時代をつくる」というこ

と。そして、そのための目標として、未病の改善を置きました。いろんな方法があると思いますが、未病の改善を進めるべきだと思いました。

未病は健康と病気の狭間です。ここを改善していきましょう。そのために「空間×ヘルスケア」と言っているのは、あらゆる空間、住宅だったりオフィスだったり、そういった空間に健康に資するハード、ソフト、あるいは考え方みたいなものを社会実装していきましょうということなのです。

ゴールを2030年に定めているのは、実は簡単なことではありません。法律を変えたり、あるいは今まで社会通念だと思われたようなことも少しみんな考えながら刷新していかなくてもいけないのではないかと考えております。技術だけではなく、いろんな考え方、ルールといったものも改定していこうとするのであれば、やはりそこそこ時間がかかりますので、少し近未来の2030年をゴールに置きました。

手段としては、メディアを丸ごと使ったオープンイノベーションと考えてやってきましたが、これは後ほどお話いたします。

我々は、「空間×ヘルスケア 2030」と3年前ぐらいから話をし出していますが、実は4つの空間を再定義してきました。住宅、オフィスとモビリティです。もう一つが薬局ですが、なぜ薬局かというのも後でお話をいたします。

一番関係してくるであろう住宅は、生活の基盤にもなってくるところですが、ここに関して一つのわかりやすいイラストを作りました。これを「ビジョナリー・フラッグ」と呼んでいます。未来の旗です。なぜこのようなことをしているかということ、実は医療とヘルスケア業界に携わっている方たちも「健康で幸福な人生 100年」というものを考え進めていますが、やはりそれ以外の方の力が必要だと思っています。すなわち、健康あるいはヘルスケア業界、医療業界の外側にいて、今、自分たちには関係ないと思っても、我々が描いたイラストを見てもらって、こういうところで自分たちの技術は役に立つ、サービスが役に立つ、そういうふうに気づいていただきたいなと思ったので簡単なイラストにしております。

ラジオなので、皆さんにお見せできませんが、Googleなどで「空間ヘルスケア」で「住宅」とか「薬局」とか検索していただくと、そのイラストとそれに繋がる記事を見いただけますので、ぜひご興味あればご覧ください。

では、住宅に関して少しご説明します。このイラストの中で、一番強調して見やすいところに置いたのが、実はお風呂場です。なぜ置いたかということ、お風呂場ではヒートショックや溺死で年間に2万人の方がお亡くなりになっているからです。一方で、交通事故というのは、最近どんどん減ってきていて、3,000人を割りました。この交通事故は、90年代は実は1万人ぐらいで推移していました。ニュースで連日報道し、「こんな悲惨な事故が起こった」「怖いよね」みたいな話で、正しく知られることによって、どんどん力が働いて、交

通安全週間を強化するとか、あるいはテクノロジー側でも交通事故をなかなか起こしづら
いようなクルマを作っていくという力が働いてきて、今 3,000 人にまで減ってきています。

一方でお風呂は、実は知られていません。私はいろいろなところでお話していても、あま
り知っている方はいらっしゃいません。これを正しく知ってもらって、ここは危険な場所な
ので、どうしましょうか?ということをおみんなで考えられたらと思っています。

実際、いろんな実証実験であるとか、ハウスメーカーは救急活動に対するサービスみたい
なものにも踏み出しておりますので、今いろんな力が働き出しているのかなと考えていま
す。

また、トイレや洗面台みたいなところで、自分のバイタルデータであるとか、あるいはど
んどん技術が進化してくると、例えばがんのスクリーニングで、超早期発見でがんを見つけ
ることも今後できるかと思えます。ですので、自分のデータ、身体の調子を見るデータをし
っかり取る、自分でそれがわかる、どういうふうになっているかってのがわかるわけではな
いので AI などで解析して、もう一つ自分の健康、未病の改善をしっかり担保してもらうサー
ビスが必要かなと思っています、それが薬局にも繋がっていく話となっております。

肝心の薬局ですが、これも Google などで「空間ヘルスケア 薬局」と検索していただ
けると、まずそのビジョナリー・フラッグという 1 枚のイラスト、2030 年にこんな薬局があ
ったらいいですねっていうのが見られますので、ぜひご覧いただければと思います。

薬局は、なぜここに空間として目をつけたかという、一つはまず今回コロナのきっかけ
で、我々は日本が医療崩壊を起こし得るということを経験しました。実は、昔から人口当
りのお医者さんの数は、先進国の中で日本は低いです。お医者さんが 32 万人に対して薬剤
師さんは 18 万人、お医者さんの半分以上いらっしゃるということで、数的にもしっかりと
担保できるかなと見ております。もう一つは薬局の拠点数です。これも皆さんご承知だと思
いますが、一般的にはあまり知られておりませんが、コンビニの数より多いです。6 万以上
ということで、薬局はコンビニの数よりも多く、いわゆる日本の津々浦々、いろんなところ
で新しいサービスをやるにふさわしい拠点数かなと思いました。

皆さんよくご承知の薬機法の改正で、服薬後のフォローとか医師へのフィードバックを
推奨されていますが、これをさらに 2030 年には未病改善の我々の伴走者になっていただ
けると、本当に健康で幸福な人生 100 年というものが作れるかなと思っています。

我々が薬局の中に描いた 4 つの大きな要素をお話します。まず、とにもかくにも一番はヘル
スケアマイスターと言って、薬剤師さんの名称も変えて、かかりつけの健康アドバイザー、
我々の健康アドバイザーになっていただけたらと考えました。これは、皆さん薬剤師さんが
こう変わるべきと言っているわけではなく、こういう我々に寄り添い伴走していただく、そ
ういうお仕事を目指している方も中には当然いらっしゃるわけで、そういう方々が「ヘルス

ケアマイスター」という新しい職種に変わっていったら、未病の改善が進むのかと思いました。

もう一つの要素は、ピッキングです。今、薬剤師さんの仕事の大きなところを占めると思いますが、もうこのピッキングは自動化しましょう。忙しい薬剤師さんの時間をしっかり作って、ヘルスケアマイスターという新しい仕事に集中していただきます。

そのヘルスケアマイスターは何をするのかというと、一番大事な仕事だと思っているのは、さきほど申し上げた住宅で取れてきたいろいろな我々の身体の調子を見るデータを、例えば AI で解析しながら薬局で集約をかけていきます。AI が見ていて少し異常値が出ているなどと思ったら、薬剤師さん、ヘルスケアマイスターさんにしっかりと見ていただく。例えばこれから先のサービスで、自分の未病の改善を見てほしいという方が薬局と契約するということはあり得ると思っています。毎月定額でいくらかお金を出していて、薬剤師さん、ヘルスケアマイスターにしっかりと自分の身体の調子を見てもらいます。いろんなアドバイスを頂戴したり、あるいは自分で持っていたバイタルデータ、他のデータを、ヘルスケアマイスターさんが見て、これは病院に誘った方がいいなと思った場合はスムーズに誘っていただくというようなことで、お医者さんの時間もしっかりと担保していくことができるのかなと思っています。

もう一つ、スクリーニング機器です。例えば非侵襲の状態、針で穴を開けないでも今は血糖値が取れるようになってきましたし、さきほど言っていたトイレでいろんなスクリーニングができるトイレができたとする、作られた当時は相当値段も高いと思いますので、薬局にそれが置かれていて、自分の簡単なスクリーンができるようになると、ふらっと立ち寄る動機づけになるのかなと思っています。そういうスクリーニングの最新機器が薬局にあったらどうだろうと思いました。そのスクリーニング機器があつて、ふらっと立ち寄る動機づけになったら、この後、大事な仕事としてコミュニケーションスペースとしてカフェみたいなスペースを薬局の中に作って、そこでヘルスケアマイスターが「ちょっと今日お腹の調子が悪いです」とか「最近なかなか寝付けないんです」というような相談に乗ります。これがすごく大事で、発病させる前にいろいろな未病の段階で改善して防いでいく、その一番大事な仕事を担うのがヘルスケアマイスター、新しい薬剤師さんです。このような形でいろいろ我々の相談に乗っていただくということがあり得るのではないかと考えています。

今日のお話の中核になる薬局薬剤師さんは、我々の未病の改善の伴走者であつて、そして病院で忙しい医師たちに対してもスムーズに我々を誘ってくれる。そして、発病させないので、相対的にやはりお医者さんの手間を軽減していくという形で、病院と我々をつなぐインテリジェンスハブみたいな役割を担えるのではないかと考えております。

2030 年に向けてもうそんなに時間があるわけではありませんが、「空間×ヘルスケア」を有益に機能させていくための鍵は薬局、そして新しい薬剤師ヘルスケアマイスターだと考えておりますので、ぜひまた皆さんからもいろいろな意見を頂戴できればと思います。